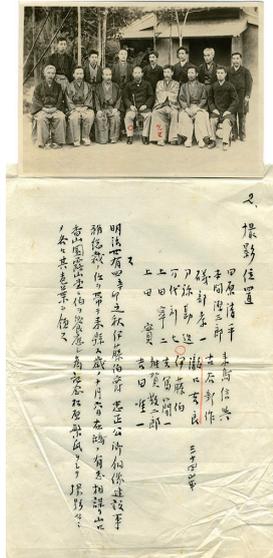


『忠正公銅像建設事務総裁・伊藤博文他集合写真』について

山口県立大学非常勤講師 上利英之

1,はじめに



(図1) 『忠正公銅像建設事務総裁・伊藤博文他集合写真』

この写真資料(図1)は日本画家・松林桂月の旧蔵で、現在でも松林家に伝わる写真群の中の1葉である。写真には和紙が貼ってあり、墨でメモ書きがある。そのメモによると、元々は桂月の恩人である萩市明木の貴族院議員も務めた瀧口吉良(号・明城)が持っていたもので、何かのタイミングで桂月の手に渡ったものであるということがわかる。また複数枚存在するようで、そのうちの1葉は菜香亭のHPにも掲載されている¹。サイズは写真部分が縦10.8cm×横15.0cm、メモ部分は縦24.5cm×横16.7cmである。

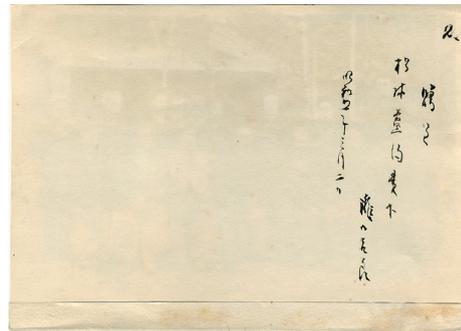
2,本稿の趣旨

今回紹介する写真は、山口市亀山公園に毛利敬親像を建設する事業の事務総裁に就任した伊藤博文が、明治24年(1891)10月6日に山口県に来県した時に香山公園の露山堂前で撮影されたものである。また撮影時期と撮影の経緯、写っている人物の名前の筆書きのメモが写真に貼り付けてある。写真とともに、

そのメモに記載されている人物や内容を紹介する。

3,写真とその正確性

まずはこの写真をなぜ松林桂月が所持していたのか。それは(図1)の上部写真部分の裏書き(図2)から経緯がわかる。その文章には、



(図2) 図1上部写真裏書き

2、

贈呈

松林畫伯貴下

瀧口吉良

昭和四年三月二日

と記してある。これによると瀧口吉良が昭和4年(1929)3月2日、松林桂月にこの写真を贈ったということだが、桂月が直接吉良から受け取ったかどうかはわからない。桂月は前年の昭和3年(1928)に台湾に渡っているが、昭和4年の春には作品を制作している²ことから、直接この写真を手に入れることは出来たと考えられる。

冒頭の「2」の数字は、別の吉良が写っている『明治24年貴族院議員諸公(仮題)』の写真のメモ書きの方が「1」となっているので、この2葉の通し番号と思われる。そしてこれらの写真は、吉良がこの6年後の昭和10年(1935)に亡くなっているため、吉良から桂月への形見分けという意味もあるのかもしれない。

資料下部のメモ書きの筆者だが、筆跡は写真の裏

¹ 「菜香亭の歴史 伊藤博文の夜会」菜香亭HP
(https://saikoutei.jp/history/ito_hirobumi.html) 2023年12月3日閲覧

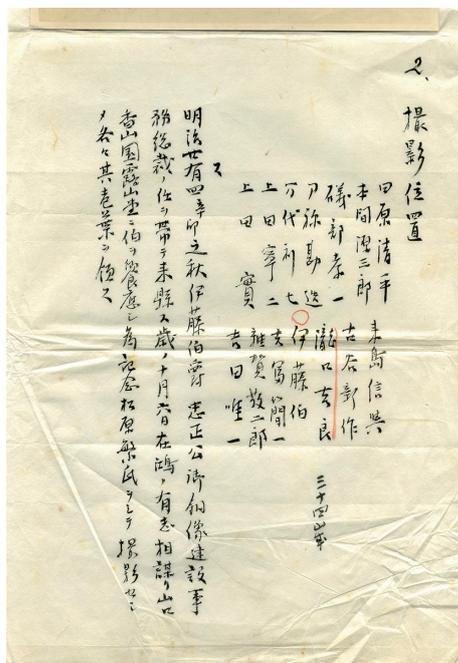
² 『没後50年 松林桂月 水墨を極め、画中に詠う』(村田隆志・監修 神戸新聞社・発行 2013年) p204

書きと違い楷書的であるが、字の癖からして、すべて同じ人物が書いたと考えられ、写真の裏書きの内容から、吉良とみていいであろう。しかし写真とメモ書きへの赤字の書き込みに「先生」、「○」、「赤線」などがあるが、これを吉良の書き込みとは考えにくく、桂月が写真を受け取ったあとに書き記したと考えられる。

以上の事と、この写真が未だに松林家蔵ということから考えても、吉良から桂月に渡されたものであると考えるのが自然で、撮影から譲渡までに時間がかかり経っているため、メモ書きの内容に多少の記憶違いや記載ミスが存在する可能性は否定出来ないが、内容は信頼できるだろう。

4、撮影された人物について

次に写真下部に添付されたメモの内容を紹介する。読み下すと、



(図3) 図1下部メモ書き

2、撮影位置

田原清平
来島信興
本間源三郎
古谷新作
磯部孝一
瀧口吉良 三十四歳
刀祢勘造 (刀禰勘三)
○伊藤伯
万代利七
吉富簡一
上田寧二
雑賀敬二郎
上田實
吉田惟一

明治廿有四辛卯之秋伊藤伯爵忠正公御銅像建設事務総裁ノ任ヲ帶テ来縣ス歳ノ十月六日在鴻ノ有志相謀り山口香山園露山堂ニ伯ヲ饗應シ為記念松原繁氏ヲシテ撮影セシメ各々其壺葉ヲ領ス

※ () は筆者による。

となる。まず冒頭の数字「2」は前述の通り写真の通し番号である。その後写っている人物と対応するように人物名が書かれており、最後に撮影年月日と撮影理由、撮影者が記されている。

写っている人数は、忠正公御銅像建設事務総裁に就任した伊藤博文を含め14人となる。そのうち博文を除く13人の略歴を簡単に紹介する。特に県名を表記していない市町村名は、全て山口県である。

後列右より、

田原清平・・・天保13年(1842)7月10日に佐波郡和田村(周南市和田)に生まれる。明治13年(1880)に山口県議会議員に当選。第百十銀行、福川銀行の取締役、村会議員、郡会議員等を歴任。大正11(1922)年8月14日、81歳で死去³。明治24年(1891)当時、山口県議会議員を務めるか⁴。
本間源三郎・・・弘化3年(1864)吉敷郡嘉川村

³ 吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』(マツノ書店 1976年) p294、山口県議会事務局編『山口県歴代議員名簿』(山口県議会事務局 1976年) p58

⁴ 前掲『山口県歴代議員名簿』p150より、明治23年(1890)3月に県議会選挙が行われ、同本p58によると、その年の4月の臨時県議会に出席しているが、その後明治26年(1893)通常議会まで議会出席は無い。明治25年(1892)3月に選挙があり、その次の選挙は明治27年(1894)3月のため、明治23年4月以降から明治25年3月に県議会議員であったかは正確には不明。

(山口市嘉川)の庄屋の家に生まれる。嘉川村村長、郡会議員、県議会議員、衆議院議員、吉敷郡農会長等を務める。明治29年(1896)藍綬褒章受章。また、大日本農会より有功章を受ける。明治41年(1908)62歳で死去。第3代山口県議会副議長を務める⁵。明治24年当時山口県議会副議長⁶。

磯部孝一・・・安政元年(1854)3月大津郡三隅下村(長門市三隅)に生まれる。山口県議会議員、株式会社防長農工銀行創立委員等を歴任、明治31年(1898)には衆議院議員となる。明治24年(1891)当時山口県議会議員⁷。

刀祢勘造(刀禰勘三)・・・安政5年(1858)9月美祢郡嘉万村(美祢市秋芳嘉万)に生まれる。美祢郡共和村(美祢市秋芳町)村長、株式会社防長農工銀行取締役、美祢水力電気株式会社社長、山口県議会議員等を歴任。昭和6年(1931)73歳で死去。明治24年(1891)当時山口県議会議員⁸。

万代利七・・・嘉永4年(1851)山口町(山口市)の豪商・萬代家(醤油製造業)に生まれる。明治12年(1879)山口町会議員となる。各種公共事業に尽力し、公共施設等に多額の寄付をした。明治36年(1903)52歳で死去⁹。

上田寧二・・・明治3年(1870)8月16日長門国吉敷郡大道村(防府市台道)に生まれる。吉富簡一の次男。明治18年(1885)11月上田家の養子となる。明治23年(1890)9月家督相続。株式会社小郡銀行取締役等を務める。明治24年(1891)上田家当主¹⁰。

上田實・・・安政4年(1857)1月2日吉敷郡大道村(防府市台道)に生まれる。上田寧二とは親戚。早くから政治経済を学び、大道村議会議員、吉敷郡議会議員、山口県議会議員等を経て、明治35(1902)年、衆議院議員となる。他にも多数公共の委員や会員、

小郡郵便局長等を務める。昭和4(1929)年4月8日死去。明治24年(1891)当時山口県議会議員、吉敷郡所得税調査委員¹¹。

前列右より、

来島信興・・・安政6年(1859)3月11日生まれる。西厚保村(美祢市西厚保町)村長、美祢郡議会議長、明治14年(1881)より美祢郡選出の山口県議会議員を務める。明治24年(1891)当時、山口県議会議員、西厚保村村長を務める¹²。

古谷新作・・・天保14年(1843)9月佐波郡植松村(防府市植松)に生まれる。大村益次郎門下で砲兵術を学び、四境の役に出戦。帰国後、山口藩兵学寮で教える。その後陸軍省に出仕。陸軍を辞し、明治12年(1879)に山口県議会議員、明治25年(1892)衆議院議員となる。他にも山口県米穀同業組合設立委員、協同会社取締役等務める。大正10年(1921)78歳で死去¹³。明治24年(1891)当時は第2代山口県議会議長¹⁴。

瀧口吉良・・・安政5年(1858)阿武郡明木(萩市明木)に生れる。明城と号す。家は代々旧藩の大庄屋格。明治19年(1886)慶応義塾を卒業し、明治21年(1888)山口県議会議員に選ばれ、その後当選4回にして県議会議長も歴任。明治23年(1890)貴族院議員に当選。明治37年(1904)衆議院議員に選ばれ、大正6年(1917)には再選する。また防長銀行頭取、萩銀行、朝鮮勧業会社、萩電燈会社等の相談役等に歴任。昭和10年(1935)8月18日77歳で没する。正六位勲四等受勲。明治24年(1891)当時は貴族院議員¹⁵。

吉富簡一・・・天保9(1838)年山口矢原村(山口

⁵ 前掲『増補近世防長人名辞典』p215、山口市ふるさと創生部文化交流課編集・発行『山口市幕末維新人物ガイドブック』(2018年)p73

⁶ 「歴代の正副議長」(山口県HP) (<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/site/gikai/25267.html>) 2023年12月2日閲覧

⁷ 衆議院事務局編『総選挙議員略歴 第1回乃至第20回』(衆議院事務局出版 1940年)国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1278238/1/31>) p49 2023年12月2日参照、前掲『山口県歴代議員名簿』p110

⁸ 井関九郎編『近代人物誌 天』(マツノ書店 1987年)p453、山口県歴史人物大辞典編纂委員会編・著『角川日本姓氏歴史人物大辞典35 山口県』(株式会社角川書店 1991年)p277、前掲『山口県歴代議員名簿』p106

⁹ 山口市史編集委員会編『山口市史』(山口市 1982年)p835

¹⁰ 井関九郎編『近代人物誌 地』(マツノ書店 1987年)p447

¹¹ 前掲『増補近世防長人名辞典』p283、前掲『近代人物誌 地』p448、前掲『山口県歴代議員名簿』p70

¹² 前掲『山口県歴代議員名簿』p105、美祢市史編集委員会編『美祢市史』(美祢市 1982年)pp711~718

¹³ 前掲『増補近世防長人名辞典』p206、前掲『総選挙議員略歴 第1回乃至第20回』p396(国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1278238/1/205>)) 2023年12月16日参照

¹⁴ 前掲「歴代の正副議長」山口県HP より 2023年12月2日閲覧

¹⁵ 前掲『増補近世防長人名辞典』pp156-157、前掲『総選挙議員略歴 第1回乃至第20回』p275(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1278238/1/144>) 2023年12月2日参照

市矢原)の豪農の家に生まれる。元治元年(1864)井上馨が袖解橋(山口市湯田)にて襲われた際看護に努め、その後慶応元(1865)年鴻城隊を結成し、井上を総督とする。明治元(1868)年~明治4(1871)年大蔵省に出仕。その後山口県議会議員、議長等を務める。明治17年(1884)には防長新聞を創刊する。明治23(1890)年衆議院議員当選。明治41(1908)年正五位に叙される。大正3(1914)年77歳で死去¹⁶。明治24年(1891)当時は衆議院議員¹⁷。

雑賀敬二郎・・・嘉永5年(1852)5月3日豊浦郡小月村(下関市小月)に清末藩士の家に生まれる。慶應義塾卒業後、文部省に出仕するが、明治10年(1877)豊浦郡豊東村(岩国市菊川町)の雑賀家を継ぐ。株式会社防長農工銀行頭取、山口県議会議長等を務める。明治29(1896)年藍綬褒章授章。明治38(1905)年53歳で死去。明治24年(1891)当時は山口県議会議員¹⁸。

吉田惟一・・・天保12年(1841)12月28日に生まれる。明治に入り山口県に出仕。その後明治13年(1880)~15年(1882)厚狭郡長、明治16年(1883)、17年(1884)赤間関区長、明治18年(1885)、19年(1886)豊浦郡長、他にも豊浦郡選出の山口県議会議員、小野田セメント株式会社監査役等を務める。明治24年(1891)当時は山口県議会議員¹⁹。

以上、簡単だが撮影された人々の略歴を述べた。刀禰勘三については、「刀禰勘造」と記してあるが、同姓同名の人物は管見の限り見当たらない。そのため、「造」は「三」の誤記とした。また、最後の吉田惟一は、忠正公銅像建設事務局で山口県での事務を担当した吉田右一²⁰の誤記である可能性も捨てきれないが、表記の人物も存在するため、そちらの略歴とした。

そしてこれらの人物がなぜ集まったのか。正確な

事は不明だが、資料のメモ書きに、「総裁ノ任ヲ帯テ来縣」とあるので、基本的には建設事業の県内地方の各責任者や国会議員、県議会議員を中心に、忠正公銅像建設事業と関係のある人物が写っていると考えるのが自然だろうか。

5、メモ後半の内容について

1) 撮影時期

メモの後半に記された内容としては先述の通り、明治24年(1891)10月6日に忠正公の銅像建設事務局総裁に就任した伊藤博文が山口県に来県し、香山公園にある露山堂に博文を饗応した後に松原繁によって撮影された写真であり、記念に各人が1葉ずつ持って帰ったということである。

まず忠正公銅像建設事業だが、これは明治22年(1889)に幕末の萩藩主・毛利敬親(忠正公)の銅像建設の計画が持ち上がり、その翌年には幕末期に萩藩の支藩主であった長府藩主・毛利元周、清末藩主・毛利元純、徳山藩主・毛利元蕃、岩国藩主・吉川経幹の銅像併設が決定し、その後敬親の養嗣子、最後の萩藩主、山口藩知事・毛利元徳の銅像の建設も決定した。本稿ではこれらの事業を一連の事業とみなし、以降「事業」と略す。

事業が立ち上がった際、総裁には山田顕義が務めていたが、明治24年9月頃に顕義は体調悪化により総裁を辞退し、その後任として伊藤博文が就任した²¹。メモに「明治廿有四辛卯之秋伊藤伯爵忠正公御銅像建設事務総裁ノ任ヲ帯テ来縣ス歳ノ十月六日(後略)」とあり、博文は明治24年中に2度来県しているが、1度目は9月中旬から10月上旬まで、2度目は11月から²²なので、この写真は1度目の来県の時となる。その後総裁は明治25年(1892)に内閣総理大臣に再任した博文に代わり再び顕義となるが、顕義は事業半ばで死去し、最終的には博文が総裁となる²³。

¹⁶ 前掲『増補近世防長人名辞典』p271、前掲『山口市幕末維新人物ガイドブック』(2018年)p48

¹⁷ 『総選挙議員略歴 第1回乃至第20回』付録p159(国立国会図書館デジタルコレクション)2023年12月16日参照

¹⁸ 前掲『増補近世防長人名辞典』p125、前掲『角川日本姓氏歴史人物大辞典35 山口県』p263、前掲『山口県歴代議員名簿』p93

¹⁹ 前掲『山口県歴代議員名簿』p94、商業興信所編・出版『日本全国諸会社役員録 明治28年』(1895年)p417(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/780110/1/242>)2023年12月16日参照、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』第4巻(寺岡書洞 1979年)p188、p371、p572、同本第5巻(1980年)p200、p409、同本第6巻(1981年)p233、p481

²⁰ 上符達紀「山田顕義と毛利敬親銅像建設事業」(『譽誌 第14号 大学史論輯』日本大学企画広報部広報課2018年)p19

²¹ 前掲「山田顕義と毛利敬親銅像建設事業」p25

²² 上符達紀「明治期における旧藩主顕彰と地域社会—毛利敬親銅像建設事業を中心に」(山口県観光スポーツ文化部県史編さん室『山口県史研究 第29号』山口県 2021年)pp129-130

²³ 前掲「山田顕義と毛利敬親銅像建設事業」pp26~28

2) 撮影場所

撮影した場所となった露山堂は、現在山口市の毛利家墓所がある香山公園（香山墓所）の南側にある。元々は毛利敬親の茶室として建てられ、明治24年（1891）4月に現在の位置に移築されたもので、その後改築や増築、修理された跡が見られるが、今も移築当時と変わらず同じ場所に存在する。またこの写真が撮影されたのも、移築された年の10月のため、大きく場所は変わらないと考えられるので、撮影された当時の撮影場所の推定を試みた。

（図4）の背後に写っているのが露山堂だが、屋根の枚数や角度、建物の間口等から（図5）の場所と思われる。画角やカメラの高さなど当時と全く同じには再現は難しいだろうが、工夫すれば同じような風景の撮影は可能かと思われる。

撮影位置としては、現在露山堂は南側に引き戸の玄関が付いているが、それとは反対側の北側の茶室等の出入り口側である。



（図4）（図1）上部写真部分。



（図5）現在の露山堂北側。

3) 撮影した人物

撮影した人物として「松原繁」という名前が記されている。この松原繁は旧士族で、八坂神社の境内入り口付近に写真館を営んでいた写真家である。現在その建物は「河村写真館」と名前を変え、平成18年（2006）山口県の有形文化財に指定されている²⁵。

4) 枚数に関して

今回の資料に関しては、オリジナルというべき写真はここに写っている人数分、14葉である。しかし本稿冒頭で紹介したように、葉香亭のHPでも紹介されていたり、『山口市史 通史篇』でも写真の一部ではあるが「香山同志会」の写真として紹介されていたりしている²⁶。何枚現存しているかはわからないが、このように後世様々な引用や紹介をされていることから、今回紹介したような信頼の出来るメモ書きが付随した写真は存在していないのではないだろうか。

6, おわりに

今回紹介した写真資料は、写真のみでは分からない情報がメモにより補足され、写真が撮影された理由等もよく分かる。

通常の文書資料や絵画資料などでは付属品や付紙がついていることも多く、また資料にもよるが写真に比べ大事に保管され、関係情報、所謂二次資料も大切にされる。

写真資料の場合、他の資料や作品などに比べ写真の登場からそこまで年月が経っていないが、複製を作れる、手軽に誰でも撮影が出来る等の理由もあり、一般的に普及しており、数だけでいえば文書・絵画資料よりは数が多い。しかしながら一部記念写真帳などの例外を除き、写真やアルバムに簡単なキャプションや裏書きがつくことはあるが、よほど重要なもの以外二次資料はほとんど存在せず、写真についての情報はほとんどの場合、写っている人物や持ち主の記憶などに頼るしかない。しかしながら、今回の写真資料は元の持ち主による詳細なメモがあるため、写真の検討が大きく進んだ。今後の忠正公銅像建設事業に関する研究の補助になるのではないだろうか。

そして、今回は撮影された人物をメモにより特定することが出来たが、今後AIなどによる顔判別等で、古写真に写っている人物の特定が進むことにより、新たな資料的価値が発見されるのではないだろう

²⁵ 山口県文化財愛護協会事務局編『山口県文化財』（山口県文化財愛護協会 2007年）p58、高田京子・文 清澤謙一・撮影「わが街日常遺産58 河村写真館」（『週刊新潮』平成21年10月15日号 新潮社 2009年）p156

²⁶ 山口市史編纂委員会『山口市史 通史篇』（山口市役所 1955年）p246

うか。

近年では古写真を見直す動きも増えてきてはいるが、未だ一般的にはあまり注目されていない。現在写真撮影はフィルムから画像データに置き換わりつつあり、プリントされた写真は、古くなればただの古い写真として処分されることが多い。それらの写真も再度価値を考え直し、新たな保存や収集などの手段を考えなければならないのではないだろうか。

参考文献

「葉香亭の歴史 伊藤博文の夜会」(葉香亭HP)
(https://saikoutei.jp/history/ito_hirobumi.html)
2023年12月3日閲覧

『没後50年 松林桂月 水墨を極め、画中に詠う』
(村田隆志・監修 神戸新聞社・発行 2013年)
吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』(マツノ書店
1976年)

山口県議会事務局編『山口県歴代議員名簿』(山口
県議会事務局 1976年)

山口市ふるさと創生部文化交流課編集・発行『山口
市幕末維新人物ガイドブック』(2018年)

「歴代の正副議長」(山口県HP) ([https://www.
pref.yamaguchi.lg.jp/site/gikai/25267.html](https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/site/gikai/25267.html))

衆議院事務局編『総選挙議員略歴 第1回乃至第20
回』(衆議院事務局出版 1940年) 国立国会図
書館デジタルコレクション ([https://dl.ndl.go.jp/
pid/1278238/1/31](https://dl.ndl.go.jp/pid/1278238/1/31)) 2023年12月2日閲覧

寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』第4巻、
第5巻、第6巻(寺岡書洞 1979年、1980年、1981年)

井関九郎編『近代人物誌 天』、『近代人物誌 地』

(マツノ書店 1987年)

山口県歴史人物大辞典編纂委員会編・著『角川日本
姓氏歴史人物大辞典35 山口県』(株式会社角川書店
1991年)

山口市史編集委員会編『山口市史』(山口市 1982年)

美祢市史編集委員会編『美祢市史』(美祢市 1982年)

商業興信所編・出版『日本全国諸会社役員録 明治
28年』(1895年)(国立国会図書館デジタルコレク
ション <https://dl.ndl.go.jp/pid/780110/1/242>) 2023
年12月16日参照

上符達紀「山田顕義と毛利敬親銅像建設事業」(『覺
誌 第14号 大学史論輯』日本大学企画広報部広報
課 2018年)

上符達紀「明治期における旧藩主顕彰と地域社会
—毛利敬親銅像建設事業を中心に—」(山口県観光
スポーツ文化部県史編さん室『山口県史研究 第29
号』山口県 2021年)

上符達紀「明治期山口県における「維新」の顕彰—
「甲子殉難士」の東光寺改装事業と「露山堂」移築

保存事業を中心に—」(山口県観光スポーツ文化部
県史編さん室『山口県史研究』第27号 山口県
2019年)

山口県文化財愛護協会事務局編『山口県文化財』
(山口県文化財愛護協会 2007年)

高田京子・文 清澤謙一・撮影「わが街日常遺産58
河村写真館」(『週刊新潮』平成21年10月15日号
新潮社 2009年)

山口市史編纂委員会『山口市史 通史篇』(山口市役
所 1955年)

網野ゆかり「失われた六基の「毛利家銅像」が物語
るもの」(『山口県地方史研究』第119号 山口県地
方史学会 2018年)

謝辞

本稿執筆にあたり松林明様には資料を提供してい
ただき感謝申し上げます。また山口県立山口図書館
総合サービスグループの皆様にはレファレンスサー
ビス等お世話になりました。その他執筆にあたりお
世話になった方々にも心より感謝申し上げます。